

こすもす便り

第8号 (2017年6月)

◇保護者の皆さまへのお知らせ紙です◇

★設定遊び

臭い、音、味、触る、見るという五感。現代人は情報の8割を視覚に頼っている。だから見ただけで「知っている」「分かった」と思い込むのだそうです。

「感」というセンサーを使い忘れているうちに使い方が分からなくなってくるようで、小さな子供を抱く経験のないまま親になると、触るということを軽視した結果、自分の赤ちゃんの触り方を教えてもらうことになるようです。

「赤ちゃんに触ることで、ストレスが減る」といった効果もあるし、触られた赤ちゃんも同じ効果が得られるらしいので、会話に変わるコミュニケーションとしても触れることは重要な事なのでしょう。

一般的に教育者は、読み、書き、計算を「基礎」といいます。しかし、感覚の土台があって初めてその上に言語や学習能力が積み上げられていくと考えれば、感覚を使うことこそ重要な「基礎」ではないかと思うのです。感覚は意識して違いを比べていくことで目覚めてきます。いかに自分が色々なセンサーを持っているかに気づき始めると、違いを感じ分ける楽しみが出てきますそれは私たちの暮らしを豊かなものにしてくれるはずです。

こすもすの設定遊びの中で行っている工作や化学実験などは、子どもたちが当たり前のことを当たり前としながらも、自由奔放なイマジネーションによって想像を豊かにしていくことをその目的のひとつとしています。

画期的な発明・発見は、案外、日常的な体験の中でたわいもない思いつきが起点となっているものです。蛇口をひねって周りをビチョビチョにしても、絵の具で手足をベタベタに汚しても叱られない、そんなところで思い切り楽しみながら想像を豊かにしていけるといいですね。

★興味・関心が広がるということ

問題行動は発達するから出てくるという側面を持っています。自分のやりたいことが分かるようになると、要求が強くなるのです。友達を叩く行為も発達の芽であることを受け止めた上で友達とうまくつきあえるように考えていきましょう。人に興味がないと悩んでいたのに、人を突き飛ばしたらただ止めるのでは、せっかく出てきた人への興味を否定してしまうことになりかねません。興味があるから衝動的になって相手を怒らせてしまう行動になったのですから、その場合は、失敗したという状況と一緒に受け止めて、やり直しましょう。せっかく芽生えた興味・関心です。たくさんせめぎ合って、折り合いを見つける力は、日常の繰り返しのなかで育っていきます。そのときに周囲から注がれている視線がどのようなものであるかが、子どもの心の育ちの重要な鍵になりますから、大事な視線は温かい「まなざし」なのです。

裏に続きます

★反抗期

子ども達は、たいていの場合「よい子」「出来る子」「言うことを聞く従順な子」が認められることを学んでしまって、よい子であろうとして、親に認められる自分であることが安心材料になってしまっている場合が多いのです。でも、親の思い通りにはいかない反抗期が必ずやってきます。

自我の目覚めは親に逆らうような行動に見えがちですが、自分は他の誰とも違う存在だと気づいて自己主張しているのです。でも、子どもは自分の気持ちを押し殺してでも親の期待に応えようと頑張るものだとすることに注意が必要です。感情を抑える機能が働く時期が来る前に抑圧すると、連続的な発達プロセスが間違ってしまう、思春期の反抗期に爆発してしまう恐れもあります。だから、反抗期をきちんと受け止めて超えさせることが必要です。

幼児期の反抗期は当たり前。それを障害と思うが故に当たりの捉え方が出来なくなって、問題行動を矯正しようとしてしまうのではないのでしょうか。

失敗をさせないようにすることより、日頃から失敗と一緒に受け止め、やり直せることを学んでいくことの方が重要です。

親にも失敗はあったはずですし、今も失敗はあるはずです。反省とやり直しを繰り返しながら大人になり、それでもなお人間はミスを犯す存在なのです。大切なのは、日頃から無駄な話や何でもない話が出来、子供が弱音や愚痴をはける関係にしておくことです。

思春期や反抗期を「難しい年頃だから」と片付けてしまうのは安易すぎるかもしれません。「親と口をきかないのは話したくなるような話題がないから」とある中学生のアンケートの回答がありました。確かに、親の関心は「勉強」や「成績」「しつけという名前の善行の押しつけ」に集中しがちです。子供にとっては一番話したくないことなのかもしれません。

親は子供を心配しているのに追い詰めてしまっているのかもしれないということに気づき、大人に聞く姿勢さえあれば親子で何でも言える雰囲気を作れます。そうすれば子供が親との関わりをあきらめてしまうようなことにはならないでしょう。

激しい競争社会で生きていくためには、傷つかないための重い鎧甲をまとって生きているのが私たちの姿かもしれません。親や大人に必要以上に気を遣う子どもが増えていることが気に掛かります。

昔は放っておいても向こう三軒両隣といった近隣の関係で様々な人とのつきあいが出来ました。今は家庭に子育ての責任が集中しすぎているので大変です。

でも一つ言えるとしたら、「人間に対する優しさこそが最高の価値だ」という人生観を確立できれば、決して人を傷つける事はないということです。